

現地レポート／八木 百合子（文化科学研究科 比較文化学専攻）

派遣先：ペルー共和国

派遣先機関名：ペルー国立クスコ大学

派遣期間：2008年7月15日～2008年10月1日

2008年9月12日報告分

授業・研究の進捗状況

クスコ大学での文献調査を終え、8月は昨年来調査をしてきた村を再度訪問し、聖人信仰に関する追加調査を約一ヶ月にわたり行った。調査期間中には村最大の祝祭であるサンタ・ロサの祭りも行われ、祭りの一部始終を観察することができた。調査後は、受入れ機関であるクスコ大学のロサス教授およびクスコを調査する人類学者や歴史学者との情報交換を行った。また、神父の紹介によりクスコ大司教座文書館の利用が可能となり、ここで19世紀初頭の調査村に関する貴重な資料の一部を入手することができた。現在は村落調査で得られた情報およびその他の文献資料の整理を行っている。

生活関連状況

8月よりクスコ市内を離れ、アプリマック県の農村において民族調査を行った。調査村は標高3400メートルの高地に位置し、8月は真冬にあたる。今年はペルー南部高地は例年よりも寒さの厳しい冬を迎えており、調査村滞在中も早朝は霜がおりる日が数日間あった。

9月に入ってクスコ市内では物価およびガソリンの高騰に対するストライキと交通運賃の値上げに対する学生のデモ行進があり、一時的に交通機関が麻痺する事態が生じた。ストの沈静化を待って調査村からクスコ市内へと戻ったので、クスコ到着が予定より遅れた。

その他報告すべき事項

9月の後半は、いったん首都リマへと渡り、村から都市へと移住した人たちへのインタビュー調査を実施する予定である。

2008年7月29日報告分

授業・研究の進捗状況

カトリック教会関係の資料を閲覧・収集するために、歴史学者ルイス・ミリョーネス教授の紹介により、リマ大司教座文書館およびカトリック大学付属リバ・アグエロ研究所の文書館の利用許可を得た。ここで博士論文にかかる教会関連の資料の一部を収集することができた。クスコ大学では、ワシントン・ロサス教授およびクスコを調査する人類学者、専攻の学生らと情報・意見交換を行った。また、国立クスコ古文書館では調査村に関する資料を収集中である。この作業と並行して、ロサス教授のアドバイスを受けながら8月からの村落調査の準備をすすめている。

生活関連状況

世界的な原油高に伴い、ペルーでも航空機のみならず、バスやタクシーの運賃も値上げされており、クスコ市内では日常生活に必須な路線バスやタクシーの料金が昨年と比べ20～25%値上がっている。また、インフレの影響で、パンなどの穀物類から、野菜、肉、魚にいたる食料品だけでなく、生活雑貨も含めてあらゆる物価が昨年よりも上昇している。これを受けて、レストランや食堂も値上げしているところが多くみられる。さらに、現地通貨(ソル)に対するドルの相場が昨年より10%以上も下がっており、経済的に日本人にとってもかなり不都合な状況が重なっている。

その他報告すべき事項

8月からはこれまで調査を行ってきたアプリマック県ワキルカ村へ移動し、村落調査を行う予定である。村落調査は8月末頃までを予定している。村にはインターネットはあるが、回線が不安定であるほか、利用時間も限られ、日本語入力ソフトもインストールされていないので、村落調査期間中はメールでの連絡は不便な状況であり、緊急の場合を除いてはメールの返信が不可能となる見込みである。連絡手段としては、村では携帯電話の利用が可能のため、村落調査中はこれを緊急の場合の連絡先として利用する。